虹の架橋は足利屋・さくらもーるアスクが毎月１日発行する地域新聞です

虹の架橋

第３６５号
令和８年1月１日発行
企画・編集　松﨑　靖
発行　㈱足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380（〒376-0101）
TEL 0277－73－1212
Fax 0277－70－1066

今月の題字
三遊亭円楽さん
（東京都）

7代目円楽さんは、10年前から毎年みどり市の創生落語でご縁をいただいています。次回は３月15日に『創生落語＆お楽しみ落語会」を開催します。

窪塚英華書道教室作品展
一月二日～二十五日

足利屋では今年も大間々町の窪塚英華書道教室の子どもたちによる新春作品展を開催いたします。

作品は昨年十一月に富山で開かれた第六十回日本北陸書道院展で院賞や特選を受賞した力作揃い。作品には子どもたちの思いや感想が丁寧な字で添えられています。

小学三年の徳江沙奈さんは「自分の心も強く、字も強く書きました」。四年の河内孝瑛さんは「みんなが幸せになるように書きました」両角栞里さんは「最後までやりきれたのは先生や母のおかげでうまく書けました」荻原優羽さんは「左ききだけどうまく書けました」。齋藤由廣さんは「千羽づるを書いて世界の平和を願いました」鏑木心乃美さんは「初めて書いたけど満足できる字が書けました」　五年の舟山莉奈さんは「力強く思いをこめた文字が書けた」。舟山莉玖さんは「文化の文の長さを調節するのがむずかしかった」　六年の斉藤奈津子さんは「みんなの心にも太陽があってほしいという気持ちをこめて書きました」中学一年の徳江遥稀さんは「目的達成、この言葉を胸に、これからも頑張っていきたいと思います」。園原天胤さんは「毎日をよりよく過ごしたいという気持ちで書きました。両角武琉さんは「一心不乱という言葉の通りに挑んだが『不乱』の部分を力み過ぎてしまい悔しかった」

書道教室の窪塚先生の願いや子供達の思いが伝わってきました。

小耳にはさんだ いい話
（文責・靖）
《365》

相田みつをさんの作品に『自分の番』という詩があります。

『父と母で二人　父と母の両親で四人　そのまた両親で八人　こうしてかぞえていくと　十代前で千二十四人　二十代前では―？なんと百万人を越すんです　過去無量のいのちのバトンを受けついで　いま　ここに自分の番を生きている　それがあなたのいのちです　それがわたしのいのちです　みつを　』

足利屋が創業百年を迎えた年に自分のルーツを知りたくなり、我が家の家系図をつくりました。役所へ行って父と母の戸籍をとり、四人の祖父母の戸籍を調べ、二人の曽祖父の戸籍も取得できました。松﨑家の曽祖父松崎浅吉は松﨑半六・いしの次男として弘化四年六月六日に足利郡北郷村樺崎で生まれ、曾祖母の小森谷コウは元治元年に生まれ、のちに勢多郡花輪村で足利屋を創業しました。浅吉の三男松﨑友次は、足利郡毛野村の戸叶武一郎の三女ヨシと結婚。足尾鉄道の大間々駅が開業した翌年の大正二年に大間々駅前停車場通りで松﨑足袋店を開業したのが大間々足利屋のルーツです。

父母と祖父母と八人の曾祖父母

母方の曽祖父中野眞親は弘化四年に生れ、嘉永四年生まれの岡田もとと明治５年に結婚しました。眞親は身長百八十センチの長身で幕末の志士のような写真が残されています。この写真は随行した京都の写真館で撮ったものだそうです。眞親の三男の中野時雄は熊田ともと結婚し、大正八年四月十四日、のちに私の母となる中野ちよが生まれました。母ちよは、前橋高等女学校を卒業し、昭和十七年に松﨑家の長男福司と結婚しました。ちよは十三歳の時に描いた十六枚の絵を嫁入り道具に入れて二十三歳の年に松﨑家に嫁ぎ、三十三歳の四月に私を産み三時間後に亡くなりました。

私たち姉弟は、松﨑、中野、戸叶、熊田、小森谷、亀山、岡田、西川家の過去無量の命のバトンを受け継いで今ここに自分の番を生きていると実感しました。

聖書に『わが子よ、あなたは父の教訓を聞き、母の教えを忘れてはならない』という言葉がありました。

曽祖父・中野眞親

世界一小さな 足利屋 トイレ美術館
櫻木進さん『連獅子（習作）』

三十年来のお付き合いを続けている桐生市の櫻木進さんが「切り絵」をはじめたということを聞いて見せてもらってきました。何事にも熱中するタイプで研究熱心な櫻木さんの切り絵はつくりはじめて二年目とは思えない見事な作品ばかりでした。その中でも特に目を引いたのが『連獅子』の切り絵でした。三ヶ月前にながめ余興場で開催された中村座錦秋特別公演で中村勘九郎さんと中村鶴松さんが花道で親子の連獅子を舞っていた姿が鮮明に思い出されました。櫻木さんの切り絵は『連獅子』の他、『千客万来』などの縁起のよい作品もありました。

今月の切り絵《365》

靖ちゃん日記

令和7年12月15日（月）

墨田区まち歩きツアーに参加した。みどり市と墨田区は、共にSDGs未来都市に選定され、環境やスポーツ振興などで連携している。10日前に千葉大学墨田サテライトキャンパスで開かれた「あつまレ！すみだサロン」のゲスト講師として呼ばれた。なかめ黒子の会や富弘美術館を囲む会の活動を話し、その時参加した区民活動家の人たちとも今日再会できた。墨田区は人間国宝の落語家・五街道雲助師匠が名誉区民として、江戸落語の文化を盛上げ、星野富弘さんのお父さんは戦前戦中に墨田区向島に住んでいたと聞いた。みどり市との共通点や接点を見つけて嬉しくなった。墨田区キラキラ商店街は、昭和の下町の風情を感じた。110円のメンチカツを食べながら歩いていると、大正初期創業のハト屋というパン屋があった。知的美人の店主がその場で揚げるコッペパンがうまかった。足利屋も大正初期創業。ハト屋はパンを売り、足利屋ではパンツを売っている。

歳神を祀って柏手二つ打ち

昔は暮れに「大神宮様のお祓い～」という呼び声で、前年のお札と新しいお札とを交換する人が伊勢から出て来たそうで、古いお札を入れる箱のことを「お祓い箱」と言ったそうです。

大間々の神明宮でお配りする神宮大麻には伊勢神宮内宮の印が押された「天照皇大神宮」の御札と「大歳神御璽」と書かれたお札が入っています。天照皇大神宮の御札は神棚に飾る時、薄紙をはがして飾り、歳神様の御札は、歳神様がお帰りになる一月七日まで飾っておくのが一般的なようです。

虹の架橋 ⇑ 検索 で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百六十六号は令和八年二月一日（日）発行予定です。

❤やっちゃんの似顔絵提供：ひさかさん